関西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話（358）2271
発行人　村井弘二
編集人　満園準一郎
（一部 10円）

授業料値上げ見送り

まず教学内容充実
・経費の節減で切りぬけ

久井理事長は10月5日、毎日新聞を使って、「44年度学費値上げはしない」ことを発表した。学友会ニュースは、「学費値上げ反対を勝ち得た」と述べた。

この久井理事長のブルジョア新聞への発表によって、昨年来問題となって来た学費値上げはさまざまの経緯ののち見送られることになった。

久井理事長発言内容
（毎日新聞10月5日より）

〝学生の運営参加には限界がある。物価、人件費の値上がりで金が不足するから学費値上げをするというのは私学経営者としてオソマツだと思う。関西大ではこれらの要素を考慮したうえ、なお経営努力で現状維持でやれると判断したわけだ。授業料はもちろん、入学金や学債、実験費の値上げもしない。学生増募も考えていない〟

この久井発言の内容は、経費節減をしながら教学内容の充実を計ろうとする姿勢を示し、一方は金不足での値上げは私学の経営者としてはオソマツだとしながらも、今日私立大学が企業的経営を余儀なくされ、それ故、学費問題が経営上の問題として表面化せざるをえないのであり、関大においても同様のこととして表面化していることを示しているといえるだろう。

しかし今日 大学 の帝国 主義的再編が進行する中で、学費の問題は、大学の矛盾が総合されたものとしてありながら、それが経営上の問題としてしか表面化しえない所に問題があるといわねばならない。

早大授業料闘争が「産学共同路線反対」として、また今日慶大では「軍学共同反対」（米軍援助費拒否）として闘われている。この他全国大学の学園闘争は、それが根底的に、体制呼応の教育に反対し、新しい大学の理念をうちたてそのことによって、教育・研究・学問の本質にさかのぼろうとする内容を持っていることで同質的であり、そうであるが故に、現代階級闘争、政治闘争との結合として闘われる。そのことが国家・文部省権力の介入を引き出してきている。

このような対大学権力との闘争が、反体制的な闘いへと発展していく中で、新しい大学のコンミューンの問題が出てきている。一つには九州大学等にみられる「学生参加「の問題であり、また一つには同志社大にみられる「安保に反対する学長の選出」運動等がそれである。久井理事長は同じ発表の中で「学生の参加には限界がある」との見解を出している。このことは、現在行なわれている」三者懇談会」形式による学生の参加、つまり、学生の唯一の発言の場を保障するものではあろうが、現実的には、それは学生の主体的な発言の場ではなく、あくまでも学校側が学生の意見を聞く場でしかなく、当局の体制内にある場に、学生が要求を持っていくという以外の場でしかない。

帝国主義政治を穏ペイした今日の小市民政治がなされている時、単なる運営、経営への参加は体制側の道具としかなりえないであろう。それ故に各国における新しい大学をめぐる斗争は、結局体制を突き破ったところにイメージされ学生の主体の獲得を通してしか展望されない。そのことがフランスにおいても現実化した如く、反体制運動として発展していくのである。

今後は、学費問題を掘り下げて〝大学〟をとらえ返しながら、大学の、関大の運動が、学生の主体性の確立と、権利の獲得へ向けて追求されていかねばならないだろう。

執行部三懇を強行
学生は遮断されて

10月15日、多くの学生の、学友会執行部の一方的な理事者との取り決めによる三者懇談会を不当とする抗議の声にもかかわらず、強行した。各学部長・教授は一口も話さないまま これを黙認していまった。

まず、学友会執行部は三懇に当って、事前にその構成者たる自治委員、パート会議を開催し、全学的問題の十分な掘り下げ、討議の義務を一切放棄しいきなり理事者との三懇の強行を試験最終日の15日に行なおうと計った。執行部のこの反学生的態度に憤ガクした多くの学生は、「学生の参加できない三懇反対、三懇の延期」を叫んで、執行部の不当行為を非難したが、執行部はそれを押し切り三懇開催を強行突破した。

三者懇談会は、理事者、教授、学生の三者によって構成され、学校当局に対し学生の利益と権利の擁護を要求する場として設定されたものである。本来ならば、9月に開催すべきものを、執行部は学校当局と結託し、秘密裏にサボタージュを企て更に、今回学生を遮断した時点に於て、試験最終日の15日に三懇の開催を進め、一切の全学的問題、要求を明きらかにすることなしに開催を強行した。その意図は何か。

不当な三懇開催に対する多くの学生の抗議の声とりわけこの不当な三懇に参加する教授会の態度を問うた時、中谷学長は「君等は三懇を妨害するだけだ、それに答える義務はない」と暴言を吐き、学生の主張、要求に恐喝的、抑圧的態度を取り続け、執行部の三懇強行に同調した。

このあと、自治委員会代表、新報代表は退場した。

なおこの三懇では、授業料値上げ見送りについて、学園祭についての二つの議題が取り上げられた。

特に授業料値上げ見送りの理由となった〝経費の節減〟について久井理事長は「紅茶を番茶にする…」というようなことを述べたといわれる。

＝夜学連結成＝
全学連・労働者の連帯へ

10月4日、京都同志社大学において、関西夜間部学生・自治会連合（略称関西夜学連）結成大会が開かれた。

激動する世界状勢、ことにわが国の帝国主義の再編過程にあって学生運動は、昨年の10・8羽田闘争以来、反戦運動から革命的反戦闘争、更に帝国主義打倒闘争へと発展し、70年安保粉砕から、70年代階級闘争という問題を踏まえてその闘争状態は、全国の多くの学園に見られるストライキ・バリケードから、帝国主義中枢権力、暴力支配の中心である防衛庁への攻撃という闘いを創り出して来た。

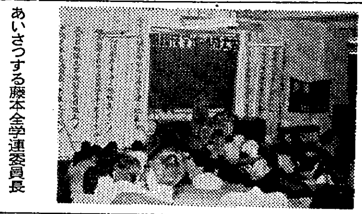
かかる状況にあって、実体のない大阪府夜協（代々木系、関大二部学友会は本年度春季学生大会にて脱退を決議）に対し、働き学ぶ夜学生の闘う部隊として関西夜学連は結成された。全学連藤本委員長、同志社大、立命館大、大阪経済大、滋賀大、関大の各二部及び夜間部 高校生代表 の結集により、終始 熱心な 討議、報告が成された。

しかし、ここで確認しなければならないのは、夜学連という組織は昼間部学生による全学連と異なる夜間部独自の、真に働き学ぶ夜学生の闘う部隊であり、更に、学生と労働者の連帯を創り出す、即ち全学連と闘う労働者の組織＝反戦青年委員会とを密接に結合させるものでなければならない。そして、こうした統一戦線によって、70年安保闘争を準備しまた更に70年代階級闘争へと運動を進展させなければならない。

日本におけるこれらの闘いと、全世界の闘う学生・労働者との連帯によって、すべての帝国主義による惨禍（侵略と抑圧と反革命）と対決しなければならない。

なお、この大会で
中央執行委員長　新屋君（同大）
同副委員長　松尾君（滋大）
書記長　平内君（関大）
書記次長　米田君（立大）
などが選出された。

あと、学内から学館まで激しいジグザグデモを展開し、午後十時閉会した。



あいさつする藤本全学連委員長

乱気流

私達が学生であることを忘れ去ってしまった程、長い夏休みが、今ではある喪失感と共に過ぎ去ってしまい、あたふたと、試験の季節も通過したようである。大学というものの中に始めて体を突っ込んだ日の新鮮な感情は、時間の中に収束してしまい、最早、過去の重みだけの、思い出の今日、明日が続く日々、安堵と焦燥の眠りも現実の圧迫の中でゆがんだ姿勢をとらざるを得ない。

そんなある日、私は新入生という特殊な存在でもない、広大な学生群の一人であることを、自然に受け入れることができる自分に、不確かな驚きと、とまどまどいを感じた。時の経過とは、かくも人間をなれさせてしまうものか。大学のすみずみまで、知りすぎる程知ってしまうことは悲しいことである。知りすぎるということは、反抗する意織、拒否する意識さえも暗闇の中でなえてしまい、噴出できないという思いが、苦渋に満ちた無力感でおそってくる。未知であるということは、可能の領域が、たとえ幻想であるにしても開かれていることだと思う。そこには（幻想的ではあるが）ある種の希望や興奮が、とらえられなくても、星のようにきらめいているのである。だが今の私はどうだろう私をおおうものは 暗闇だけである。かすかな星のまたたきさえも見い出すことができない。

〝昨日は終った！
明日はまだ来ない！〟

ゴダールが映像で打ち込んだ刻印は、私の脳裡から永遠に消えそうもない。無限に続く現在を生き続けることの困難と苦悶を、絶望に深化させることもできないで、私はゆらゆらと彷徨しつづけなければならないのだろうか。私を夢中にさせた怒りや真実というものを希求するにしても、あれはつかの間の異邦人の好奇だったのだろうか。ある種の盲目的ともいえる可能性が、見えてしまった不可能事、ふと、いつの間にか姿を変えてしまっているといった逆転してしまった精神の根は引き返しがつかないようだ。そこで私は、見飽き、感じ飽き、泥沼の過飽和状態の中で何をどうしようというのか可能の領域が身をせばめ、不可能の領域がこれ程までに広がってしまっていることに、今さらながら、嘆息し、どんなにもがき苦しんでも、もどって来ない過去の思い出のトリデを、自ら、不用意に習慣の必力によって押し開いてしまった今になって…

古びて、慢性化した悪魔的惰性の生活のために、無限に膨らんだアパシーの波が、私の足許にうち寄せる。これに位置する私の裡の、何が抵抗の原点となりうるのか。

（C・I）

【お知らせ】

関西大学混声合唱団
リーダークランツ
第三回演奏会
11月27日夜6時30分より
朝日生命ホール　200円
混声合唱のための組曲「旅」
「流浪の民」
フォークソング・ポピュラー
日本民謡、その他

映画
「三里塚の夏」
製作小川プロダクション
10月30日～11月6日（3日除く）
昼1時より3回上映
場所・電子会館
製作上映カンパ三〇〇円
（カンパ券は新報社で発売中です）

社告

情勢は刻々と変化しています。関西大学の内と外と、新報社はそこへの主体的な関りにおいて、真にジャーナリズムを通じて、情勢を切開して行きたいと思っています。一・二年生諸君の入社を募ります。

関西大学新報社

古書籍全般売買
天牛本店
道頓堀中座前
電話(21)二七五八～九番

みおつくし印発売元
寝具全般、室内装飾
カーテンカーペット施工
木下寝具店
大阪市大淀区長柄西通一丁目三八
TEL 大阪 (351) 7701・1960・5906

気軽なあなたの
金融機関
質「むかでや」
天六市バス操車場横
TEL (351) 9527

10.21斗争を安保斗争へ

10月21日夜、梅田、淀屋橋、難波は、人民の広場化し無政府情況を現出した。翌日のブルジョア新聞は一斉に騒乱罪の適用と、〝非常識〟を市民に訴えるキャンペーンをはりたてた。それは郊外住宅地に住む小市民に怒りとおどろきと興奮を与えただろう。梅田、淀屋橋、難波に集まった市民には何を意味し、何を暴露したか、言うまでもなく商業新聞のオソマツさデッチ上げ、さらに各紙に対する、怒りとおどろき、興奮ではなかったろうか。このことは明きらかに、情況が局地的な無政府情況として存在し一方では体制の秩序が新聞報導を通じてがなりたてられることによって情況を一部暴力学生の場にすりかえてしまったということである。情況の本流が今や大河として流れ出ていることの押し隠しは、しかし、騒乱罪の適用ということによって失敗しているのであり、本流は安保闘争へ向けて奔流となっているといわねばならないだろう。ベトナム反戦運動の底流が反安保であり、それが表面化してきたことを認知せねばならないし、川幅を広くし深くし流れは70年安保へ一直線に進む。

その日午後七時頃、赤ヘルメット（社学同派）の学生約一千六〇〇名が淀屋橋に現われた。国家権力機動隊は一斉に地下鉄出口を封鎖した。角材とヘルメットの学生は突激し突破して、淀屋橋上で激しい投石戦を展開した。一方大阪駅前に現れた白ヘルメット（中核派）五〇〇名も機動隊の暴力的デモ規制に後退しながら投石、両方ともそこに市民が登場した。最初は学生、市民、機動隊は独立してあったがしだいに市民の声は〝機動隊帰れ〟〝機動隊の暴力を許すな〟と高まってゆく。扇町に結集した総評系労働者三万五千、革マル派全学連四〇〇、社青同解放派三〇〇、府高連二〇〇、自治会共闘二〇〇〇、ベ平連一〇〇〇は、そのころ扇町から御堂筋へさしかかっていた。約四万の労働者、学生はジグザグデモ、フランスデモで行進機動隊の規制はことごとく破られた。7時半頃この部隊が淀屋橋に到着した時は社学同学生は中の島公園と御道筋を南へ向けて分断されており、淀屋橋上は市民と黒い不気味なヘルメット、等身大の盾で完全に封鎖されていた。総評系労働者の一部は指揮者を含めて、学生をののしり出した。〝トロッキスト学生のために通れない〟〝学生はのいてくれ〟〝彼らは機動隊の弾圧の中で市民と学生によって創り出された情況を判断できないが故に、彼らの任務を設定できえず、学生への暴害者、体制支配者と同質の人間となってしまったのである。扇町から中の島公園までデモする、ベトナム戦争に反対してその表現をデモで行なうという内容でしかなく、それも動員されて来ている。それだけでしかなく、10・21斗争が70年安保斗争であるという意識性を欠如しており、カンパニア斗争としてしかなかったのではなかろうか。その事が、帝国主義の路線に全学連と連帯して等質の意識性で斗っている反戦青年委員会への理由の無い非論理的な攻撃としてもあると聞く。

このあと、淀屋橋上で数回激突したが弾圧され、一部分は突破したが一時淀屋橋を避けて御堂筋を南下した。難波についた社学同を中心とした学生、反戦青年委員会は夜十二時近くまで投石あと総括集会に入いった。しかし難波駅前に集った市民はその間に機動隊を取りかこみ激しく投石しだしたのである。こういった自然発生的な市民の登場は、今年一月の佐世保闘争に主には端を発しているといえる。しかし今回の10・21闘争はそれをはるかに越える多くの人々が登場しており、約七万人に近い人々が曽根崎署に不当弾圧と、不当逮捕の抗議につめかけるという場面さえ現出された。市民の自然発生性を捉えることは難しい。抽象的な言い方をすれば、〝反戦・反核・反安保・反反革命〟というばく然とした意識が、斗争の過激化の中で、機動隊への怒り、憎しみから、対国家権力の本質まで迫まりうる存在であると言えるのではなかろう。

新宿で騒乱罪適用

無政府状況の中の市民

総括にかえて

14・21斗争を総括するにあたって、3つの視点を挙げておきたい。

①10・21斗争は70年安保斗争として闘われる。つまり日本帝国主義の総路線、70年安保決戦の突破となる闘いである。

②70年安保闘争へ向けて、諸組織潮流の統一戦線をめぐる動き。

③関大における運動

以上の点について若干総括を行なう。

日本帝国主義の動向、それは言うまでもなく高度経済成長政策から重化学工業化、それが国際的な同質化をもたらしている。米、西独、仏、伊、英、日本の市場圏の獲得戦、市場再分割戦となっており、その中で、日帝は帝国主義軍隊の強化をはかりながら日米安保同盟・ASPACの軍事同盟化を追求している。そしてこの外的侵略を内からささえるものとしての、国内秩序の再編、それは国益国防論であり、民族ナショナリズムのイデオロギー攻勢である。しかし最も重要な70年安保の要は〝沖縄〟にある。沖縄こそ日帝の東南アジア前戦基地であり、日米反共軍事同盟のカギである。民族主義を打ち出すことによって沖縄返還運動を進めている日帝と、祖国の独立と平和ということによって、米軍追い出し、沖縄日本民族の祖国復帰の運動をするというのは、全くナショナリズムとして同じである。いずれファシズムへ吸引されてしまう、そこに日共は気づいているのかいないのか。

日帝の動向がこうした国際的な市場再分割戦の中で軍事力の強化を許ることに対する攻撃として、東京に於る防衛庁突入闘争があっただろう。全学連10・21闘争は明確に70年安保闘争の突破口を切り開いたと言えるだろう。

しかし、社共、あるいは系統的にその下にある潮流においては、いまだにベトナム反戦運動の域を脱していないところもある。先述した総評部隊の一部はよい例であろう。あるいはまた、10・21闘争を米タン輸送阻止闘争で闘った部隊の位置づけは、ベトナム反戦アメリカは出ていけ以外のなにものでもない、代々木においても、ベトナム反戦、沖縄三大選挙勝利、諸要求貫徹運動としてあり、70年安保体制は、10・21斗争に存在しなかった大衆の自然発生的な流動の情況すら判断できえなかった。それ故10・21斗争に安保問題をとらえることができなかった部分はブルジョア新聞と同じような、常識的な対応しか出来なかった。

この事はまた当然のことながら70年安保闘争へ向けた統一戦線形式の萌芽すら見い出しえないことになった。社民との統一戦線を追求する一部全学連は、その夢を社会党の絶縁状の前で覚まされるであろうし、社共統一戦線も、その両方のセクトの強さ故、政策論争すらできないのではなかろうか。

関大における10・21闘争の取り組みは前期試験前より行なわれていた。日共・民青諸君を中心とするクラス活動促進者会議は、全国学生統一行動委員会のもとに関大実行委員会を結成、全学ストライキを最初は戦術とした。代々木系全学連大会における10・21闘争方針をそのまま受けついだものと聞くが、実行委員会自体がすでにセクトの強い組織であり、そのもとに学生を結集することは難しかったのではなかろうか。

一方学生戦線も、スト実行委員会を結成した。当初、学生戦線、ベ平連、文芸反戦（のち文芸復興準備会）、反戦青年委（準）等々を結集した形で追求されていったこの二つの実行委員会が、関大Ⅱ部における運動を担うことになった訳であるが、結果的には敗北に終ったのではなかろうか。

関大Ⅱ部の状況を認知し、そこに根を張る運動を形成するためには今一つ何かが欠けていたのではなかろうか。運動の主体者の側にも、学生の側にも共通した思想不毛の状況への切開の方法を極度につきつめ、学問・教育・研究の本質をも打ち出す必要があったのではないだろうか。今一つ問題になることは、関大Ⅱ部における統一戦線方式による運動ができないということであろう。このこともまた、関大Ⅱ部あるいは大学問題の追求を通しての運動の中でしか明確にされてこないだろう。

以上が、10・21闘争の大体の総括の視点であろう。各組織は早急に総括を出し、10・12闘争の報告から、討論を深め、大学問題、安保問題に至る過程を深く全学的な問題としなければならないし、クラス、サークルに於いても同様のことについて討論を繰り返えす必要があろう。

大学の本質への討論を

論説

今日の大学が、帝国主義的再編過程に組み込まれ、政府・文部省以[illegible]、私立大学の理事会あるいは[illegible]研究が[illegible]国六十を越[illegible]と伝えられ、しかも問題は増々深刻化してくる。それは、紛争に対する権力体制側の、紛争＝秩序の破壊＝暴力という問題の核心を抜きにした介入と自民党文教調査会の、体制を左からささえさせ、さらに強力な産学共同を押し進めようとする方向と、あるいはまた、個別大学独自で進められている。〝学生対策〟として表われており、若手教授、助手陣を含んだ学生の、新しい大学の追求を決定的に対決せざるを得ない状態にまで緊張してきている。

国際的には、フランス五月革命に存在したように、大学の民主化これは、前近代的大学制度を葬り去り、階級闘争を激化させ、いわば未来の大学を追求した。西ドイツでは「非常事態法」で明確に帝国主義的攻勢をかけようとした政府打倒からNATO（北大西洋条約機構）の粉砕へと、青学一体となった運動を展開しており、メキシコも、大学問題は反政府運動として闘われている。

こういった国際的高揚期にあるいは帝国主義政府からの学生と、革命的労働者が連帯した、〝大学粉砕闘争〟であり、日本に於ける大学粉砕[illegible]、等質の基調をなしていると言えるだろう。このことは大学問題が、各国の支配体制、世界状勢から規定されていることを明確にし、日日においては、資本主義体制の矛盾のうっ積として、膨大にふくれ上った大学が、今や体制内秩序のもとで、教育、学問、研究の場としての存立基盤を失いつつあることを示しており、大学闘争が、新たな秩序の樹立と、学生体制による大学の管理運営を追求し、そのことによって、国際階級闘争の渦中で、革命的な労働者と共に、体制の破壊→新しい社会体制の創出を目ざしていることを意味している。つまり今日の大学紛争は、反対制、反帝国主義闘争としてあり、大学における学生の権力の奪取、このことの問題なしには問題の解決はないということを明確にしている。

主体としての学生、労働者によって新しい秩序は形成される。文部省、大学当局、あるいは、自民党文教調査会なるもの改良策は、根底的に拒否されねばならない。新しい大学の樹立、教育・研究・学問の場としての大学は、抑圧、搾取、侵略者の手ではなく、それを打ち砕く者の手で提出され樹立されねばならない。

ゼミナール、自主カリキュウムサークル活動の本質の追求をわれわれはわれわれの問題として明確にし、われわれの手で成しとげなければならない。

教室が無いからゼミナールの設置はできないというナンセンスな教学内宮の充実方式を打ち破る、われわれの運動の形成を急がねばならないだろうそのために、クラス討論を繰り返し、われわれの計画をたてて自主的な実施運営を追求する必要があるだろう。

書籍特売セール
11月5日より1週間
一般書籍、専門書、文庫、雑誌
格安で勉学条件に奉仕
読書の秋、そして物価上昇の秋
生協が、勤労学生の皆様に奉仕する日
関西大学生活協同組合外販、天六